

## 肺高血圧

### 肺高血圧とは？

肺動脈の血圧は、腕などで測る体の血圧に比べてかなり低い（3～4割以下）のが正常です。これが高くなってしまふ（平均血圧で25 mmHg以上）症状を肺高血圧と呼び、さまざまな原因で起こります。肺動脈の血圧は、心臓カテーテル検査で直接測定したり、心エコー検査の所見から推定したりする必要があります。小児では、心室中隔欠損など先天性心疾患に伴うものが多く、肺疾患によるものもあります。明らかな原因が見られない特発性肺動脈性肺高血圧症（IPAH）は重症の疾患で、一部に遺伝性があります。

### どのような症状が起きますか

肺高血圧が軽度の場合は自覚症状がない場合もありますが、進行すれば運動時の息切れ、胸痛、動悸、失神などが起こります。高度の肺高血圧では心不全や突然死の危険があります。

### どのように診断しますか

胸部レントゲン写真、心電図検査、心エコー検査、血液検査（特にBNPまたはNT-pro BNPの値）などを行い、肺高血圧が疑われれば、心臓カテーテル検査で肺高血圧の程度や成因を評価します。

### どのように治療しますか

先天性心疾患に伴う肺高血圧の場合は、適切な時期に修復手術を行うことが大切です。手術後に肺高血圧が残存する場合や、特発性肺動脈性肺高血圧症などでは、肺血管拡張薬の内服や持続静注療法、在宅酸素療法などが行われます。これらの治療が無効な重症例では、肺移植が行われる場合もあります。難治性の特発性肺動脈性肺高血圧症も、種々の肺血管拡張薬が開発されたことから、良い経過をとる例も増えてきました。